

民謡紀行《3》

柳原 藤忠

(昭和39年工業化学科卒)



◇ 秋田船方節

九州のハイヤ節を北前船の船乗り達が港々の酒席で覚え、次の港へ持ち込む。港の騒ぎ唄で「出雲節」の変化したものらしい。

船の舵を取りながら唄った事から、港の女達は船方節と呼ぶようになった。すぐ近くの「酒田船方節」や「能代船方節」は出雲節の面影を残すが、秋田船方節は男鹿の「船川節」を改編し秋田船方節とし更に、佐々木常雄が昭和33年のNHKのど自慢全国大会出場の際、伴奏は浅野梅若が手を入れ唄の最後の「つらい〜」のくだりで声を張る様に節回しを手直して優勝した。以後、佐々木常雄の節回しが広まっていった。

○ (ハーヤッショ ヤッショ) ハー
 (ハーヤッショ ヤッショ) 三十五反の
 (ハーヤッショ ヤッショ) 帆を巻き上げて
 (ハーヤッショ ヤッショ) 鳥も通わぬ 沖走る
 その時 しげに会うたなら (ハーヤッショ ヤッショ)
 綱も碇も 手につかぬ 今度船乗り やめよかと
 (ハーヤッショ ヤッショ)

◇ 姉こもさ

元唄は岩手県南部地方で、鉱山の鑄銭たたら職人の間で唄われた「銭吹き唄」で粗鉄を溶かしながら唄った作業歌であったが、秋田に入ってから作業歌とは程遠い唄になった。「姉こもさ」の「もさ」とは、「もし姉さんよ」と言う程の意味で花も盛りが過ぎると手折るものが居なくなるぞ!との意味である。歌詞も5・7・5を二つ重ねて一歌としている。

○ 姉こもさ ヤーエ 誇らば誇れ 若いうち
 桜花 ヤーエ 咲いての後に 誰れ折らば

数節続けて見ると連歌の様な独特の風格があり、素朴で美しい節廻しの中に哀調をたたえた静かな唄となっている。銭を生み出す目出度い唄であった事から、祝い座敷でも用いられる様になった。しっとりした趣があるいい唄である。

◇ たんと節

「たんと節」は秋田・青森・北海道で唄われているが、本場は秋田である。仙北地方の農村で農民達が酒盛り唄として唄って来た。元来は山伏神楽系の郷土芸能「番楽」の中のひとこまを唄ったものである。新しい橋を造る時、多くの縄を必要とするが、その手始めに藁を打つ。この藁を打つ姿を踊りの振付けにした事から、軽妙な味わいの楽しい唄になった。これを昭和9年頃、仙北郡太田村出身の「黒沢三市」が吹きこんでから有名になった。

○ ハー ひとつ 人目の関所を破り
 連れて行くのが現れた 現れた
 コラ お江戸へ行くとして
 津軽えた 津軽に お江戸があるものか
 ごう恥さらして たんと たんと
 あいこの上作 その訳だんよ

ここには一番の詩のみ記したが二番も三晩も詩が楽しい。軽妙さが際立った唄である。我が故郷にはこんな楽しい唄がある。

◇ 酒屋唄

秋田は東北一の醸造石数を誇る県で醸造戸も多い。霜月になると一斉に酒造りの作業にかり「米とぎ唄」「元摺唄」「元つき唄」「權引き唄」などが醸造所から響いてくる。中でも酒母の元造りが核心で、この時の唄「酒屋唄」が代表になっている。

○ アァ ドッコイ ドッコイ

ハー さんさ酒屋の ヤエ 始まる時はのヤエ
 ヘラも杓子も ヤエ アリヤ 手につかぬヨ
 アァ ドッコイ ドッコイ

この唄は湯沢地方に伝えられて来た秋田を代表する唄である。秋田人にとって秋田の酒を飲みながら酒屋唄を唄う時が至福の時ではないだろうか。酒で思い出すのは「ドブロク」である。昔は何処の家庭でも作っていた。ドブロクが出来ると税務署対策で糞(かめ)ごと山に隠して置く、あけび採り、きのこ採りで山へ行くと糞に遭遇する。子供の時から喉を潤してきた。子供ながら旨いものだ、と。これで酒が嫌いになる訳がない。秋田の酒、最高である。余談になるが、熊が里の近くに出没するらしい、ドブロクで熊を酔わせ捕獲する…と言う妙案??? 秋田の熊は酒好きだ。



総会での民謡披露 / 三味線で伴奏する筆者(左端)

労働安全コンサルタント

登録No: 土 第1213号

小野 鐵雄

(昭和38年 土木科卒)

〒279-0011 千葉県浦安市美浜5-6-1003

TEL&FAX. 047-352-8925

携帯. 090-6566-7936

E-mail: safety-con_tetsuo_o@pa2.so-net.ne.jp